

住江織物、合皮で車内装に攻勢

デザインと「エシカル」売りに

住江織物は自動車内装材として、合成皮革を繊維生地（フアブリック）に次ぐ柱に育てる。フアブリックで培ったデザイン力を生かした製品を自動車メーカーに提案。製造時の環境負荷も抑えて商機を探る。品質向上や動物保護の意識の高まりによる天然皮革の代替需要を取り込む。

マツダが2020年10月に発売した新型多目的スポーツ車（SUV）「MX-30」。

スタイリッシュなシートの側面と背裏に住江織物の合成皮革が使われた。上級モデルではシートを中心に走るアクセント「グレースコード」に両素材を組み合わせて独創性を高めた。デザインを統括したスミノエティンテクノの古林成英氏は「マツダに新鮮味を持って受け入れられた」と胸を張る。

住江織物は天井からカーマットまで様々な自動車内装材を手掛け、フアブリック製のシート表皮でも国内トップ

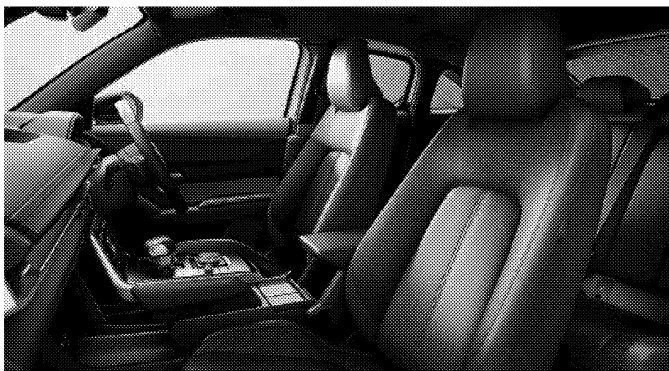
クラスのシェアを持つ。多角化を進めるなかで2007年に合成皮革に参入。日産のSUV「エクストレイル」のシート向けに量産を始めた。共和レザーやアレックスなどの皮革メーカーに比べて後発組ではあるが、色や柄のバリエーションが広いフアブリックでの経験をいかした独自の強いデザインが評価されて徐々に事業を広げてきた。

自動車メーカーの環境対応の動きにも応える。「MX-30」で使われた合成皮革「EFL Leather」では、樹脂を調合する際に使う有機溶媒を水に切り替えることで環境負荷を抑えた。既に他の自動車メーカーからの引き合いもある。新型コロナウイルスの感染拡大の影響をうけて自動車やバス、鉄道の内装材事業全体では振るわないなか、合成皮革は「足元でも非常に好調」（吉川一三会長兼社長）と気を吐いている。背景には自動車内装材向け

合成皮革市場の拡大がある。技術力の底上げで「素人目には天然皮革と区別がつかない」（同社）レベルまで品質が向上し、コストが数倍高い天然皮革からの代替が進んでいる。摩擦防止の表面塗装が必須でないため、機能加工もしやすいという。エシカル消費が広がるなか、動物保護のために天然皮革を避ける欧米発のトレンドも追い風となっている。

住江織物は抗菌や抗ウイルスの機能を持つ製品の開発やシート以外の内装材への展開も進め、数十億円とみられる合成皮革事業の売上高を24年5月期までに3割引き上げる考えだ。ただ、同じく天然皮革の代替を狙う素材「人工皮革」では東レや旭化成が増産を進めるなど、各社の競争は激しい。デザインや環境対応などで独自色を出し続けられるか、住江織物の底力が問われるぞうだ。

（荻野聡祐）



マツダの新型車のシートに住江織物の合成皮革が採用された



培ってきたデザイン力を生かした製品作りを進める